令和８年３月１１日
府中市立小柳小学校
校長　　内井　利樹

令和７年度　学校経営報告

１　今年度の取組と自己評価

(1) 目指す学校像について

「Well-Being 溢れる学校」を目指して、教育活動を行った。学習指導においては、学びを選択したり振り返ったりして、主体的に学習に取り組むことや、友達とやり取りをして考えを深められるようにすることを共通の目標として、授業づくりに取り組んだ。生活指導、特別活動などにおいても、子供の「～したい」という気持ちを大切にしながら、教育活動を実施した。

全国学力・学習状況調査の児童質問紙では、「学級の友達との間で話し合う活動を通して、自分の考えを深めたり、新たな考え方に気づいたりすることができていますか」という質問項目に対し、「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と答えた児童は、前年度比で５．５ポイント上昇した。更に、「学習した内容について、分かった点や、よく分からなかった点を見直し、次の学習につなげることができていますか」という質問項目に対しては、「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と答えた児童は、前年度比で５．８ポイント上昇した。

学校全体で取り組んだ成果がはっきりと表れた結果となったが、更なる改善を通して、子供たちが主体的に学校生活を送ることができるようにしていきたい。

(2) 重点目標への取組と自己評価

① かしこい子の育成

主体的・対話的で深い学びを具現化するために、校内研究のテーマを「主体的に発見、対話、決定、表現する子供の育成　～ICT の有効な活用を通して～」として、自律的に学ぶ子供を育てるための手だてを講じて授業づくりに取り組んだ。

- 教員には単元で子供を育てる意識をもたせ、単元全体の問題意識をもたせ、学習方法や順序を選択させるスタイルで、学習を進められるようにした。
- 「分かったこと」「できるようになったこと」「感じたこと」とともに、「分からなかったこと」「まだできないこと」「次にやってみたいこと」についても振り返らせ、自己調整力を身に付けられるようにした。

全国学力・学習状況調査の各教科の正答率で東京都の平均値と比較すると、国語が＋４ポイント、算数が－１ポイント、理科が＋２ポイントであった。それぞれ前年比（理科は３年前比）では国語が＋９ポイント、算数が＋３ポイント、理科が＋２ポイントと、理解度としては大幅に上昇している。また、無回答の割合でも、全教科において東京都の平均を大きく下回る数値となっており、粘り強く取り組む姿勢も育っていることが読み取れる。

しかし、児童質問紙では、「５年生までに受けた授業では、課題の解決に向けて、自分で考え、自分から取り組んでいましたか」という質問項目については、「当てはまる」「どちらかといえば当てはまる」と答えた児童は東京都の平均値よりも９．１ポイントも低く、更なる授業改善を図る必要がある。

② やさしい子の育成

自分のよさ、友達のよさを見付け、自己肯定感や自己有用感を高めるために、人権尊重の精神を基盤とした指導に取り組み、友達と一緒に活動することに喜びを感じられるようにした。

- いじめはどのような理由があっても許されることではないことを学年に応じて指導し、温かい人間関係を築けるようにした。トラブルの早期発見、早期対応に努めた。
- 様々な理由から登校状況が不安定な子供や保護者を中心に、早期の支援、組織的な支援に努め、不登校の未然防止、早期発見、早期対応を徹底した。

全国学力・学習状況調査の児童質問紙では、「自分には、よいところがあると思いますか」という項目について、８７．８％があてはまる、だいたいあてはまると答えている。これは東京都の平均値よりわずかに高く、前年度比でもわずかに上昇している。さらに、「先生は、あなたのよいところを認めてくれていると思いますか」という項目について、９６．３％があてはまる、だいたいあてはまると答えている。これは東京都の平均値より４．５ポイント高く、前年度でも１０．８ポイント増加している。「褒めて認めて価値付ける」を合言葉に継続してきたことが一定程度の成果を上げているといえる。

また、「いじめは、どんな理由があってもいけないことだと思いますか」という項目について、９７．５％があてはまる、だいたいあてはまると答えている。これは東京都の平均値より１．１ポイント高く、前年度でも４．２ポイント増加している。迅速かつ丁寧な対応を徹底していることが数値としても現れている。

さらに、年間３０日以上欠席している不登校傾向の児童数は昨年度比で半減している。サポートルームの活用、支援員と担任、管理職、外部機関との連携の成果が一定程度上がっているということである。しかし、逆に不登校が長期化する児童の数も増えており、支援員の効果的な活用も含めて、さらなる取り組みが必要である。

③　元気な子の育成

熱中症対策に十分留意しながら、多様な運動を通して体を動かす喜びを感じさせるとともに、自分の心と体を自己調整できるようにすることに重点を置いた指導に取り組んだ。

- 様々なジャンルのプロスポーツ選手を招き、低学年から様々な運動に触れる機会を設定し、運動への興味・関心を高めるようにした。
- ５月初めから１０月末までの期間はＷＢＧＴ計を教員に必ず持たせて、水分補給にも十分留意しながら体育の授業を実施した。

学校評価の児童アンケートでは、「運動することが楽しい。」という項目について、９２％があてはまる、だいたいあてはまると答えている。これは前年度比で１ポイント減少している。保護者アンケートでは、「教師は体力の向上を図るとともに『体を動かすことが好きな児童』の育成に取り組んでいる。」という項目について、９５％があてはまる、だいたいあてはまると答えている。これは前年度比で１．７ポイント増加している。

全国体力・運動能力、運動習慣等調査や東京都統一体力テストの結果を考察すると、５０ｍ走やシャトルランを苦手としている児童が多かった。今後、走る運動を多く取り入れながら、体を動かすことに喜びを感じられるようにしていくことが課題である。

④　地域・保護者との信頼関係の構築

生活科はもちろんのこと、総合的な学習では、地域の自然や歴史、地理的環境などについての単元を設定し、地域や保護者から学ぶことを通して地域に親しみを感じ、地域の事柄や人々を理解できるようにした。

また、避難所開設委員会を年間３回開催し、ＬＰガスの使用やアルファ米の炊き出し、簡易トイレの設置など、実際に避難所を開設したときに優先的に行わなくてはいけない事柄について訓練をした。学校公開の時に合わせて行ったので、保護者に周知するよい機会となった。

- 子供たちを地域やＰＴＡの行事に積極的に参加させ、地域の一員である意識を高めるようにした。
- 六中学区、九中学区の学校と連携をとり、共通理解の基で子供を育てるようにした。
- 地域の人材を活用したり地域の環境を生かしたりしたカリキュラムを進めた。
- 避難所開設委員会を開催し、防災を中心とした地域とのつながりを進めた。

避難所開設を含む安全のための取組を、さらに進めていくことが課題である。

⑤ 働き方改革の推進

教員の時間外勤務について、１２月までの時間外勤務の月平均時間が３３時間となり、２年前から－１２時間、１年前から－６時間となった。更なる改善が必要ではあるが、教員の意識は確実に高まっている。

- 学校行事、諸会議、校内組織等の見直しをさらに進めた。
- 学校経営支援事業や副校長等校務改善事業を有効活用し、校内事務の軽減と効率化をさらに進めた。

働きやすい職場環境づくりを目指している。精神的に不安定な教員は数名在籍しているが、チームワークよく支え合うことで、病休などには至っていない。

⑥ 全ての教育活動の基となる、教師力の向上

子供に選択させる授業改善、不登校やいじめの早期発見・早期解決を大きな柱として、自分たちの指導を振り返らせ、学び合わせることで、教師力の向上を目指した。

- 単元で子供を育てる意識をもたせ、学習方法や順序などを選択させる単元構成で計画をさせて、同じ視点で授業を振り返られるようにした。
- 学年会で、月に２日以上休んでいる子供の様子や、子供同士のトラブルを共有させるとともに、支援部や生活指導部に共有することで、組織で素早く対応できるようにした。
- 観察授業では各自が１学期につき１５分×３回の授業参観を行い、お互いの授業のよいところを参考にできるようにさせた。

校内研究を中心に、個別最適な学びと協働的な学びを充実させ、主体的に発見、対話、決定、表現する子供の育成に、学校全体で取り組むことができた。学習だけでなく特別活動においても子供発信で取り組めるように、教員の意識は高まっていた。日常的な 0JT は十分に行われている。子供同士のトラブルや不登校傾向への対応など、早期に組織で対応することも徹底できている。しかし、教員間の意識の差を埋めていくことが今後の課題である。

２　次年度以降の課題と対応策

⑴ 主体的に発見、対話、決定、表現する子供を育てること

主体的・対話的で深い学びの実装に向けて、全ての学年、全ての教科において問題解決的な授業づくりに取り組んでいく。そのために以下のことを徹底する。

○ 単元のゴールイメージを出発点とした単元構想をし、子供が学習方法や順序を選択しながら協働的に学ぶ学習スタイルを確立し、問題解決能力を身に付けられるようにする。

○ ＩＣＴの有効な活用方法をさらに検討し、調べること以外にも表現したりまとめたりすることについてもタブレット端末を適切に活用し、思考力や表現力を伸ばす。

○ 小中連携のもと、中学校区で共通した学びの視点及び学習規律による指導を徹底する。

(2) 自分も相手も大切にし、共につながることができる子を育てること

自分のよさや相手のよさを認識し、自己肯定感や自己有用感を高め、共に学び行動することに喜びを感じられるようにする。そのために以下のことを徹底する。

○ 人権尊重の精神を大切にし、学校の教育活動全体を通して多様性を認め、自己を振り返り、よりよい自己の実現を目指したり他者を尊重したりできるようにする。

○ 好きなこと、得意なこと、できたこと、友達から学んだこと、一緒にいてよかったこと、すごいと思ったこと等々の気持ちを意識させる。

○ 特別支援学級と通常学級の子供の交流および共同学習を推進し、お互いを思いやる心を育て、全ての子供たちが学ぶ喜びを味わい、共生社会の一員としての自覚を醸成する。

○ 支援員の活用やＳＳＷなどの外部人材との連携を通して、不登校が長期化しないように支援を充実させる。

(3) 心身の変化に気付き、粘り強く頑張り、自分を高める子を育てること

体を動かすことに喜びを感じさせるとともに、心身の状態をメタ認知させ、自己調整できるようにする。そのために以下のことを徹底する。

○ 運動の日常化を進め、熱中症対策を万全に講じながら、全校及び各学級ですすんで体を鍛えるような場と機会の拡充を図り、健康な心と体づくりを推進する。

○ 心と体の調子や動きを振り返る機会を適宜設定し、心や体の変化に意識を高められるようにするとともに、気持ちや体をコントロールしようとする素地を育成する。

○ 近隣のプロスポーツチームを招聘し、学習を行ったり話を伺ったりする機会を設け、体を動かすことへの関心を高める。

(4) 地域・保護者との連携を進めること

地域・保護者との双方向の連携を深め、地域の中で子供を育てるようにする。そのために以下のことを徹底する。

○ 全ての学年で「ふるさと学習」の単元を設定し、将来にわたってふるさと府中を愛し誇りをもてるよう指導の充実を図り、地域の施設や環境、人材を生かした学習に取り組む。

○ 地域・保護者から寄せられたアンケート調査の結果を学校の教育活動に反映させる。